慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和三十年度春期史學科見學旅行記
Sub Title	
Author	志水, 正司(Shimizu, Masaji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.28, No.3/4 (1956. 3) ,p.167(445)- 168(446)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　報

昭和三十年度春期史學科見學旅行記

五月八日、相模國分寺址及び日向藥師見學のため小田急海老名驛に集合したのは、淺子・河北兩先生はじめ二十一名。薄雲を透した柔かな日射をうけて、驛から南へ緩い傾斜をのぼつて行くと、路傍に國分寺講堂址の石標が立つている。あたりをみまわせば、桑畑の中に礎石が點々と數えられる。先生の御説明によるとこの外にも地下に埋まる數個が存しているとのことである。こゝから南の塔址へ行く。恰度海老名町文化委員の兒島鉚造氏がおいで下さつたので、この相模國分寺についての御説明をお願いした。卽ちこの國分寺も聖武天皇の勅願により創建されたものであるが、法隆寺式の伽藍配置を示すなど、國分寺中最も古いものに屬すると考えられる。しかし、日本紀略等にも見えるように弘仁十年の罹災で灰燼に歸したという。さて塔址についてみるに、これも法隆寺と同樣の二重基壇の上に、心礎は失われているが、十個余の大きな自然石の礎石が整然と並んでいる。目を上げると段丘の下方に、奈良朝の條里制の名殘を留めるという路が田甫中を縱走しているのが遠く眺められた。東の金堂址には野菜畑から人家の庭先にかけて、一應横八個縱五個の礎石が數えられ、金堂は七間四面に復原される。耕地となつてもはや基壇の俤は窺い難い。

次いで北に數百米離れた尼寺址へ行く。金堂址は礎石も失われて、ただ土壇の上にその痕跡をとゞめるのみで、その南に中門址が存し、更に西塔址があつて、大安寺式伽藍配置をもつていたと推定されるが古を偲ぶよすがもない。

ここから東北の臺地へ登ると淸水寺がある。短い讀經の後、本尊千手觀音像を拜觀する。七尺余りの木彫像で古風を摸している。御説明によると元祿年間に湧河寺から移座せられたものであるとのことである。この外奉納額など見學して山を下る。現國分寺は昨年燒失したということで、燒跡も未だ生々しい。鐘樓だけが殘つており、その鐘は銘文によるに正應五年(1292)源季賴等が天下靜謐・子孫泰平を祈つて奉納したものである。次いで町役場の入口にある溫古館に、多數の國分寺瓦と附近出土の石器土器などが集められているのを、しばし見學した。

海老名町役場で少し遲れた晝食をとつた後伊勢原に出て日向藥師へ向つた。兩側に古杉の立並ぶ、急な坂道を辿ること十分余、七間五面單層草葺の大きな本堂の前に出る。堂の中に御案内を戴いて、まず正面中央の厨子に鎭められている藥師三尊を拜する。三重の蓮華座上に結跏趺坐する中尊と、その左右に脇侍する日光

月光二菩薩の立像であつて、いずれも鼻目口唇の造作は刀法鋭く深く、中尊の衣文には飜波式の名殘をとどめるなど、樣式上藤原初期のものであろう。しかし、その飜波式は意欲的量性の特質を缺き、また峻嚴な相好はあどけなくも感ぜられる。顏面等の小部分を除いては、全體鑿目を荒く横縞に殘した所謂鉈彫りである。淺子先生の詳細な御說明によれば、この鉈彫の像は主として關東以北に分布するものであり、これが一つの完成された彫像であるか、或は木彫の工程中のいわゆる荒彫の段階にあるものか未だ論議の定まらぬところであるとのことである。そこには何か都會的洗練とは異つた東國人の野性的な技巧といつたものが働いているようにも思われた。さて厨子の兩側の須彌壇には優雅な日光月光兩菩薩の立像及び重厚な四天王、そして漆箔の金色さびた丈六の阿彌陀・藥師が配置され、その前に等身の十二神將が並んでいる。一堂中に平安から鎌倉にかけての佛像がうち並ぶさまはまさに壯觀というべく、關東には他に例のないことであろう。この他堂の隅に風化して輪廓もおぼろげな木像の破片が幾つか横たえられていた。尙境內の鐘樓には曆應三年(1340)の銘文のある銅鐘が存し、そこに「勸請十二神將」とみえるのは現在の十二神將を指すものであろうといわれている。そのすぐ下に白い躑躅が靜かに咲いていた。こうして私たちは一日の有意義な見學旅行を終えたのである。

（志水正司記）

昭和三十年度史學科秋季見學旅行記

昭和三十年度史學科秋季見學旅行は伊木先生を始め、淺子教授、竹田、清水兩助教授の指導の下に十月六日から四日間にわたり、信濃路に行われた。今年は昨年の山陰地方とは大分趣が違つたため學生の參加も多く、六十名に達する程であつた。

十月六日　雨

日程の最初は信濃國分寺の見學であつたが、夜半から降り出した雨は朝になつても止まず上田丸子電鐵八日堂驛から泥道の中を金堂跡を左に見ながらその後方稍小高い丘の上にある現在の國分寺境內に向つた。國分寺は云うまでもなく天平十三年聖武天皇の勅により國每に建立したものであるが、信濃國分寺は天慶の亂に全燒しその後現在の地に移されたが戰國の兵火にかかり、面影を傳えているのは三重塔のみである。本堂は江戸時代の再建であるが、荒れはてゝ見るべくもない。三重塔は室町時代のもので三間三層、屋根檜皮葺樣の銅板葺、枓栱は三平先、軒二重繁榧、上に相輪が立ててある。外觀は和樣風であるが枓栱、初層內部等を見ると唐樣の影響が强く現れている。ここで土地の古建築に造詣の深い山浦政氏の紹介を受け、これから先、色々と案內や說明を願う事になつた。金堂趾は來た道の傍にあり、僅に創建當時の礎石